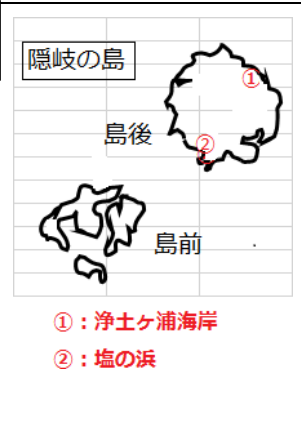


隠岐の自然学散歩－3「日本海の形成と隠岐の島」

隠岐の島が日本海の孤島として存在している理由を考えてみましょう。約2,600万年前以降、それまでユーラシア大陸の東端にあった日本列島の基盤島弧が、地殻の下のマントルで発生したマグマの激しい上昇対流により押し広げられ、徐々に大陸より離れて行きそこに湖ができました。その後漂移は更に拡大し、やがて海水が流入して日本海が出来たのです。その際島弧は大きく二分割され西半分は時計廻り、東半分は反時計廻り、即ち観音開きに移動して列島が「逆くの字型」に折れ曲がってしまったのです。

これらの地殻変動に似かよった現象としては、アフリカ東縁部に存在する大地溝帯を現在進行中のモデルとして考えれば良く理解できます。



隠岐島後にはこの間に堆積したであろう陸成堆積岩及び海成堆積岩があちこちに残っています。国の名勝に指定されている景勝地の浄土ヶ浦海岸には、淡水系の貝の化石が含まれた堆積岩の見事な層序を目の当たりに眺めることができます。

また島の西側にある津戸の塩の浜には、海洋性の堆積物である珪藻土の地層があり、以前は工業用に採掘されていました。

この様に島後では日本列島が大陸より正に分離する前の湖の時代や完全に分離した海域の時代、約2千万年前後に堆積した地層がその証拠として残っているのです。



国立公園・浄土ヶ浦の切手

さて日本海の形成に関して、地質愛好者の間では有名なエピソードをご紹介します。

「夏目漱石門下の随筆家としてもよく知られる寺田寅彦（1927）は、日本海沿岸に浮かぶ壱岐・隠岐・佐波・粟島・奥尻・利尻などの島々が、日本列島の海岸線からの距離に規則性のあることや、地質がたがいに似ていることなどに注目し、それらの島々はおそらく日本列島がアジア大陸から分離して太平洋側へ張り出してくる途中で引き裂かれ取り残された断片ではないか、また日本海は日本列島が漂移した結果できた落ち込みではないかと考えた。」※

この仮説は明治初期に来日したドイツ人の地質学者ナウマンがフォッサマグナを発見した事と同じくらい重要で先見性のある学説と考えられ、彼が優れた科学者としての一端を示す逸話です。



【大山・隠岐国立公園の内、代表的な景観と言われる「浄土ヶ浦海岸」】

挿画の中央、右手前の岩塊が堆積岩

到 絵師が描いた切手を模した挿画はパロディ風に構成されているので、それをさがして判じて見よう。



浄土ヶ浦の陸成堆積岩の縞模様



塩の浜の珪藻土露頭（海成堆積岩）

※文献：新版地学教育講座－8「日本列島のおいたち」東海大学出版会発行、をそのまま引用